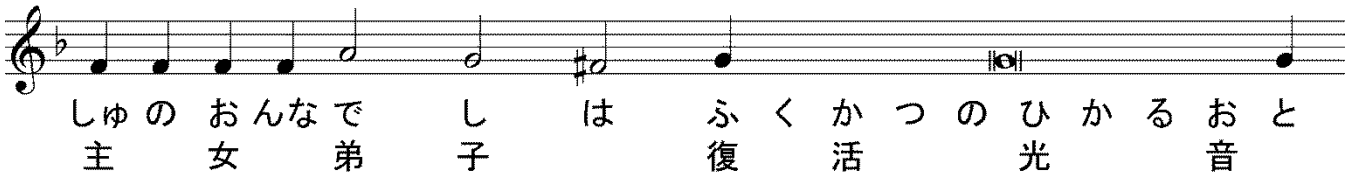
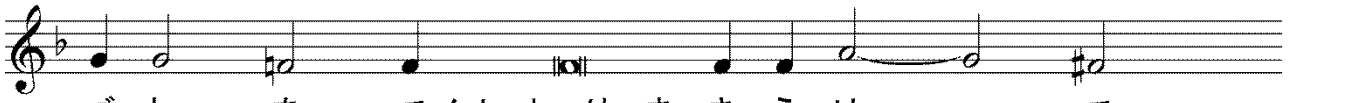
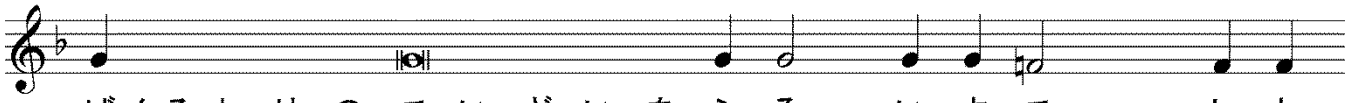
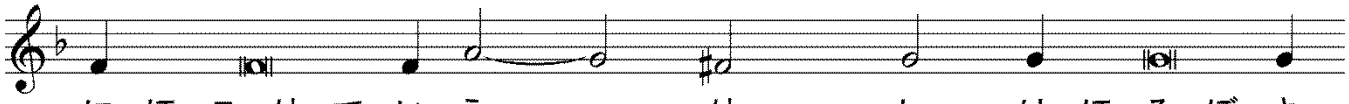
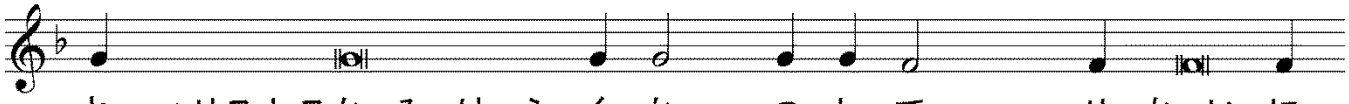
【　主日アポリティキオン　第４調　】



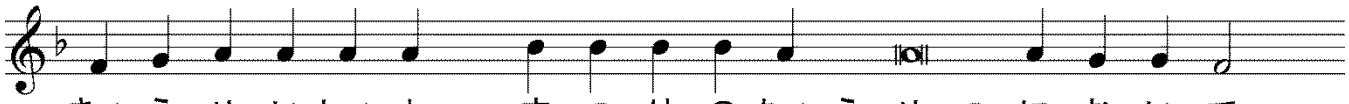


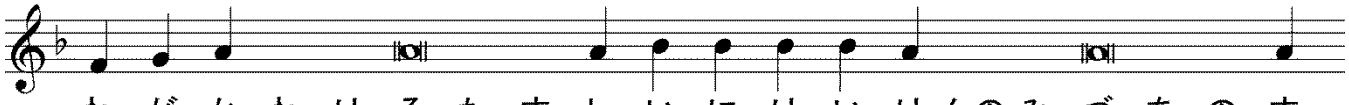


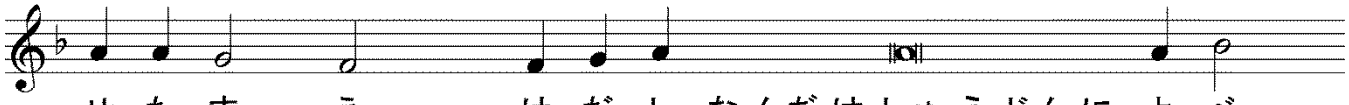


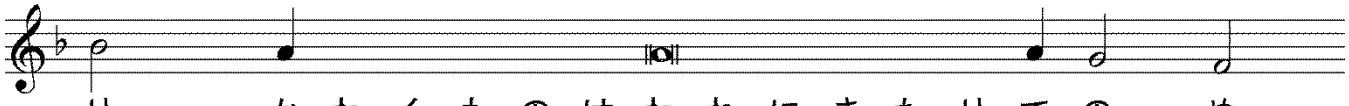


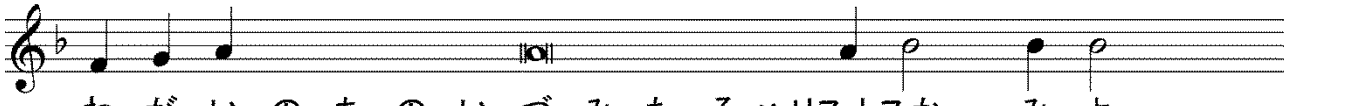
【　中節祭日の讃詞　第８調　】

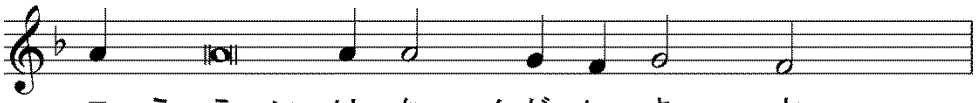






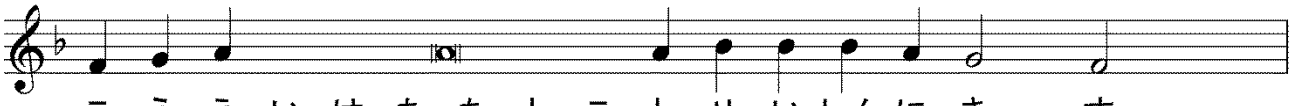




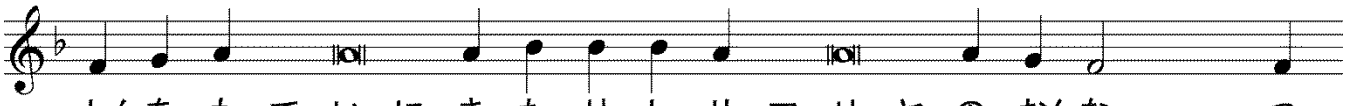


こうえいはなんぢにきす。
光榮爾歸

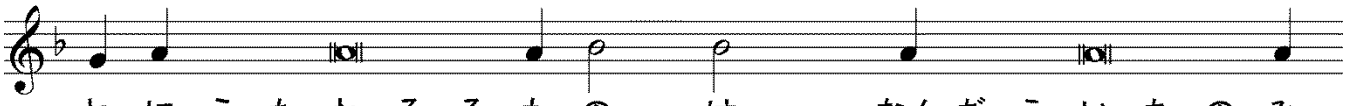
【 サマリヤ婦のコンダック 第８調 】



こうえいはちちとことせいしんにきす。
光榮父子聖神歸

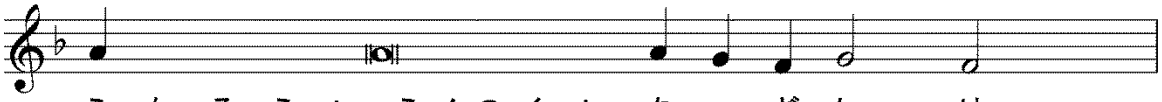


しんをもていにきたりしサマリヤのおんな、つ
信以井來婦恒



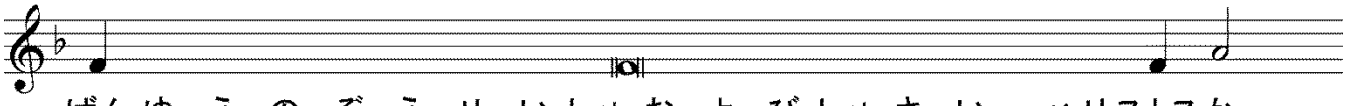
ねにうたわるるものは、なんぢえいちのみ
歌者爾睿智水

づをみて、あくまでこれをのみて、う
見飽之飲上



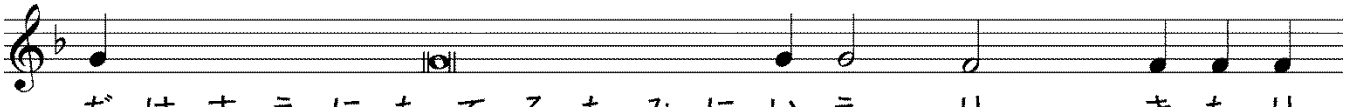
えなるえいえんのくにをつぎたり。
永遠國嗣

【 中節祭日のコンダック 第４調 】

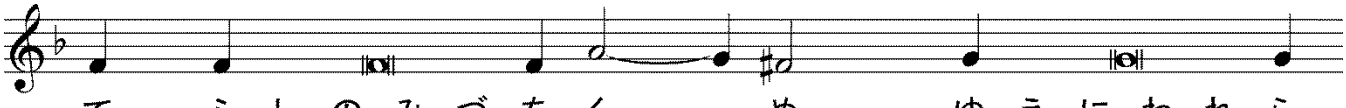


ばんゆうのぞうせいしゅおよびしゅさい、ハリストスか
萬有造成主及主宰神

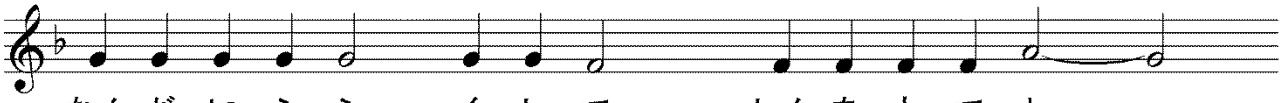
みよ、りっぽうのまつりなかばにして、なん
律法節筵半爾



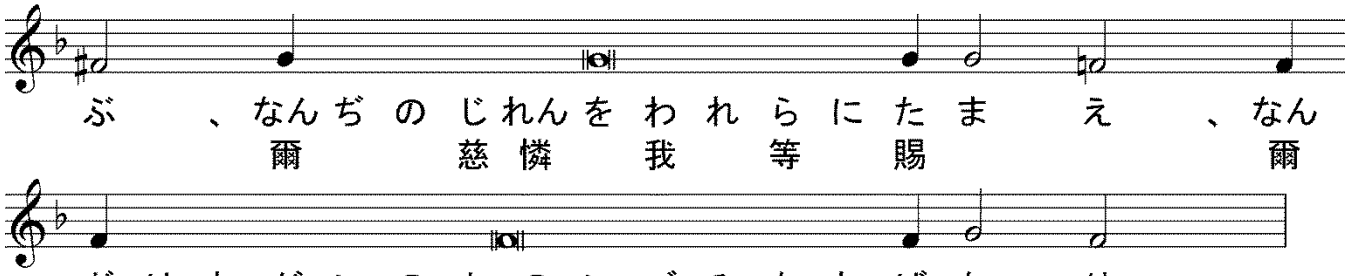
ぢはまえにたてるたみにいえり、きたり
前立民言來



て、ふしのみづをくめ、ゆえにわれら
不死水汲故我等



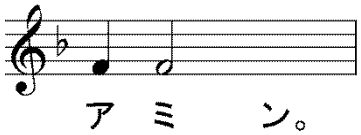
なんぢにふふくして、しんをもてよ
爾俯伏信以呼

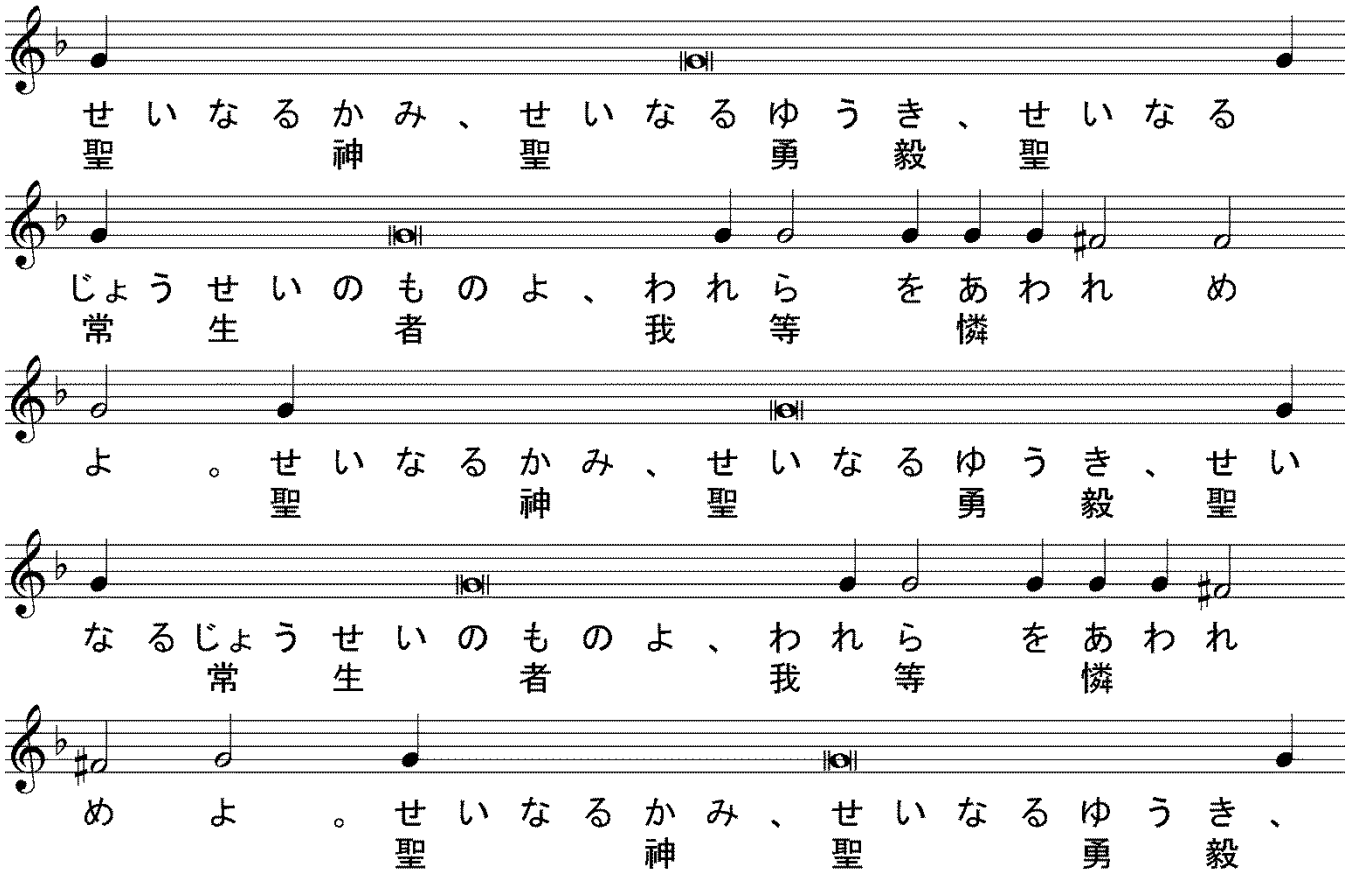


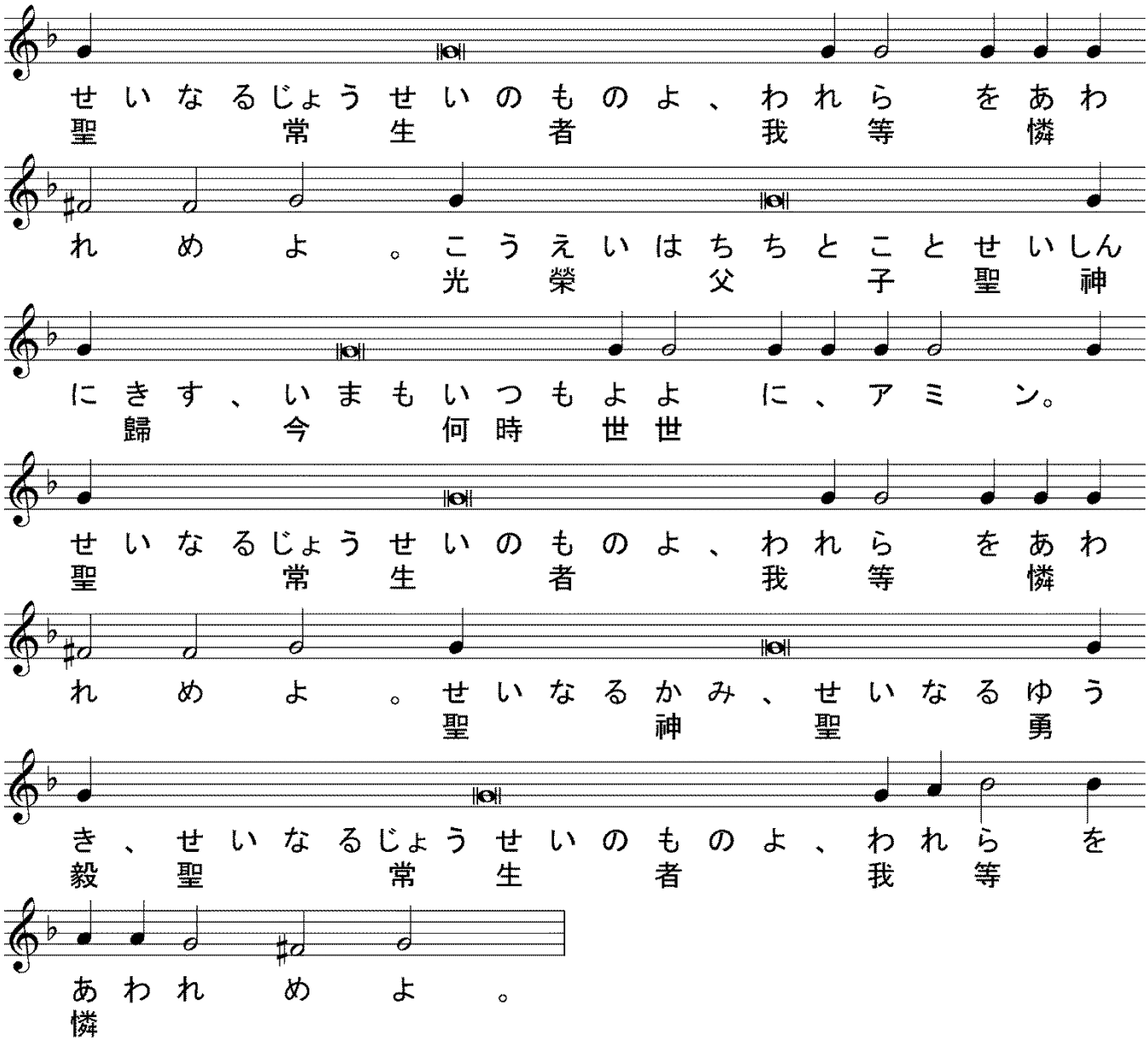
【　聖三の歌　】

代禱）主(しゅ)よ、敬虔(けいけん)なる者(もの)を救(すく)い、及(およ)び我等(われら)に聆(き)き給(たま)え、

代禱）世世(よよ)に、



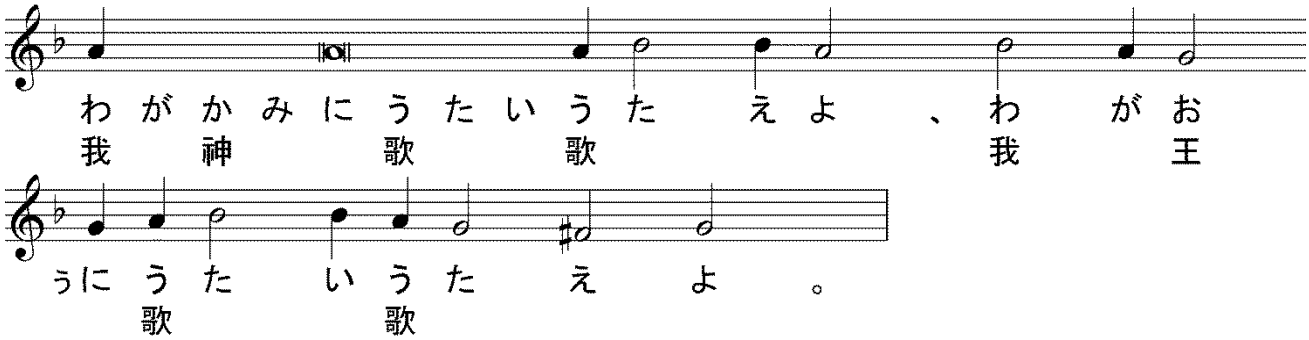




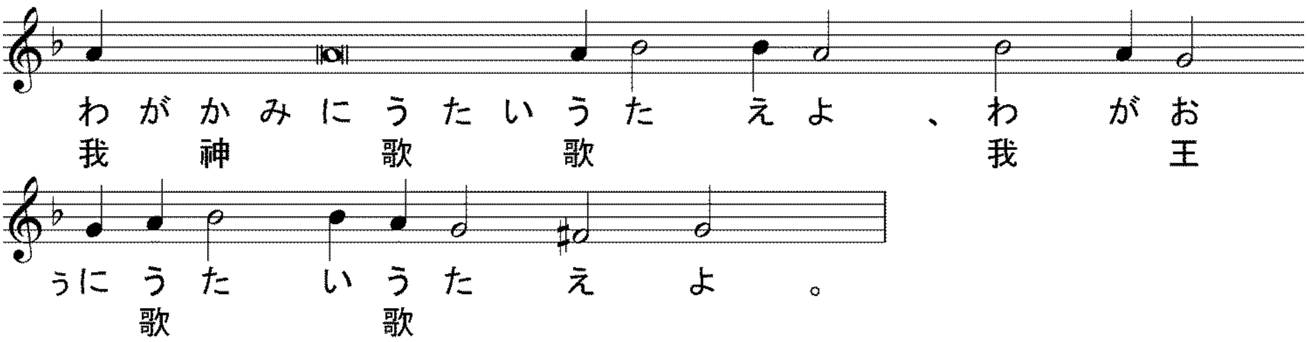
【　提綱（プロキメン）第3調　】

代禱）睿智（えいち）、

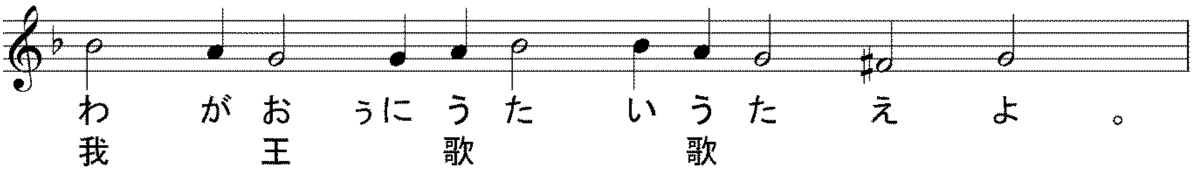
誦經）プロキメン、我（わ）が神（かみ）に歌（うた）い歌（うた）えよ、我（わ）が王（おう）に歌（うた）い歌（うた）えよ、



誦經）萬民（ばんみん）よ、手（て）を拍（う）ち、歡（よろこび）の聲（こえ）を以（もつ）て神（かみ）に呼（よ）べ、



誦經）我(わ)が神(かみ)に歌(うた)い歌(うた)えよ、



【　使徒經（アポストロス）23 端　聖使徒行實 11 章 19 節～26 節、29、30 節　】

代禱）睿智(えいち)、

誦經）聖使徒行實(せいしとこうじつ)の讀(よみ)、

代禱）謹(つつし)みて聽(き)くべし、

誦經）彼(か)の日(ひ)、ステファンの時(とき)に起(き)りし窘逐(きんちく)に因(よ)りて散(さん)じたる者(もの)は、往(ゆ)きて、フィニキヤ、キプル、アンティオヒヤにまで至(いた)りしが、イウデヤ人(じん)の外(ほか)何人(なんぴと)にも言(ことば)を傳(つた)えざりき。然(しか)れども彼等(かれら)の中(うち)にキプル及(およ)びキリネヤの人人(ひとびと)あり、アンティオヒヤに入(い)りて、主(しゅ)イイススを福音(ふくいん)して、エリン人(じん)に傳(つた)えたり。主(しゅ)の手(て)彼等(かれら)と偕(とも)に在(あ)り、多數(たすう)の人(ひと)信(しん)じて主(しゅ)に歸(き)せり。此(こ)の事(こと)の聲聞(きこえ)イェルサリムに在(あ)る教會(きょうかい)の耳(みみ)に及(およ)びたれば、ヴァルナヴァを遣(つかわ)して、アンティオヒヤに至(いた)らしめたり。彼來(かれきた)りて、神(かみ)の恩寵(おんちょう)を見(み)て喜(よろこ)び、且衆人(かつしゅうじん)に、心(こころ)を堅(かた)くして、主(しゅ)に從(したが)うことを勸(すす)めたり。蓋彼(けだしかれ)は善人(ぜんにん)にして、聖神(せいしん)と信(しん)とに滿(み)てられたる者(もの)なり。是(ここ)に於(おい)て許多(あまた)の民(たみ)は主(しゅ)に就(つ)けり。其後(そののち)ヴァルナヴァはタルスに往(ゆ)きて、サウルを尋(たづ)ね、之(これ)に遇(あ)いて、アンティオヒヤに攜(たづさ)え至(いた)れり。彼等一年間教會(かれらいちねんかんきょうかい)に集(あつま)りて、許多(あまた)の民(たみ)を訓(おし)えたり。門徒(もんと)が「ハリスティアニン」と稱(しょう)せらるること、アンティオヒヤより始(はじ)まれり。其時門徒各(そのときもんとおのおの)其有(そのも)てる所(ところ)に隨(したが)いて、イウデヤに居(お)る兄弟(けいてい)に扶助(たすけ)を餽(おく)らんことを定(さだ)めたり。遂(つい)に之(これ)を行(おこな)いて、ヴァルナヴァ及(およ)びサウルの手(て)に託(たく)して、長老等(ちょうろうら)に寄(よ)せたり。

＊＊＊

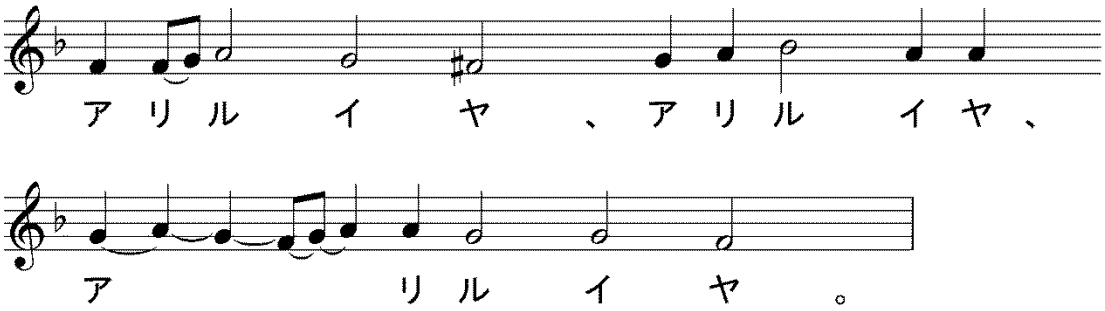
（比較用　口語訳）ステパノのことで起った迫害のために散らされた人々は、ピニケ、クプロ、アンテオケまでも進んで行ったが、ユダヤ人以外の者には、だれにも御言を語っていなかった。ところが、その中に数人のクプロ人とクレネ人がいて、アンテオケに行ってからギリシヤ人にも呼びかけ、主イエスを宣べ伝えていた。そして、主のみ手が彼らと共にあったため、信じて主に帰依するものの数が多かった。このうわさがエルサレムにある教会に伝わってきたので、教会はバルナバをアンテオケにつかわした。彼は、そこに着いて、神のめぐみを見てよろこび、主に対する信仰を揺るがない心で持ちつづけるようにと、みんなの者を励ました。彼は聖霊と信仰とに満ちた立派な人であったからである。こうして主に加わる人々が、大ぜいになった。そこでバルナバはサウロを捜しにタルソへ出かけて行き、彼を見つけたうえ、アンテオケに連れて帰った。ふたりは、まる一年、ともどもに教会で集まりをし、大ぜいの人々を教えた。このアンテオケで初めて、弟子たちがクリスチャンと呼ばれるようになった。そこで弟子たちは、それぞれの力に応じて、ユダヤに住んでいる兄弟たちに援助を送ることに決めた。そして、それをバルナバとサウロとの手に託して、長老たちに送りとどけた。

＊＊＊

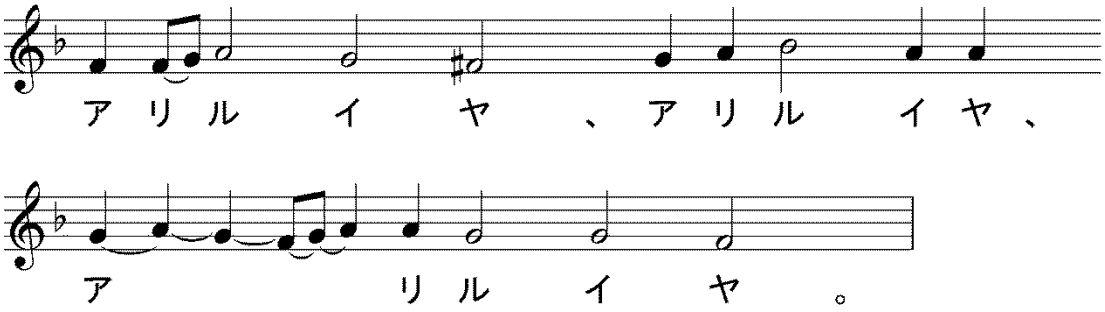
代禱）睿智（えいち）、

誦經）アリルイヤ、

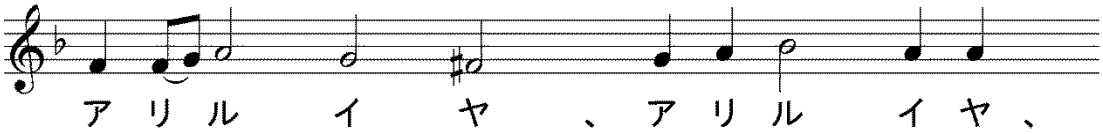
【　アリルイヤ　主日第５調　】

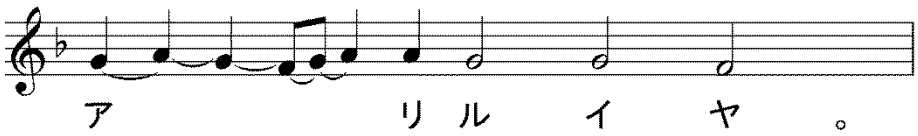


誦經）神（かみ）よ、爾（なんぢ）の寶座（ほうざ）は世世（よよ）に在（あ）り、爾（なんぢ）の國（くに）の權柄（けんぺい）は正直（せいちょく）の權柄（けんぺい）なり、



誦經）爾（なんぢ）は義（ぎ）を愛（あい）し、不法（ふほう）を惡（にく）めり、

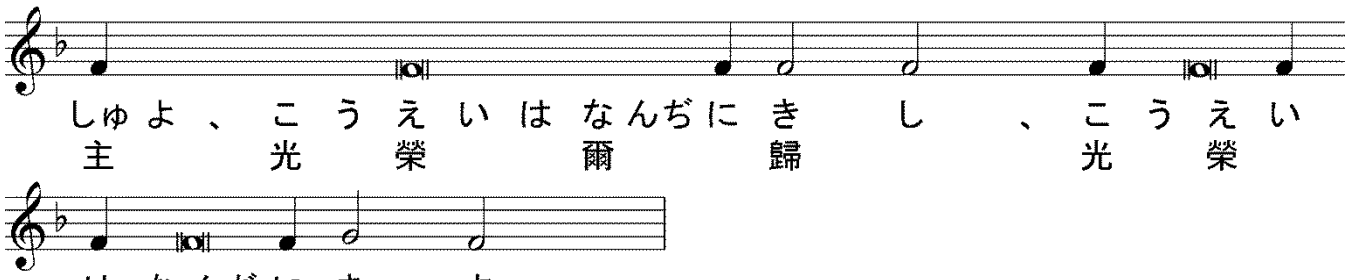


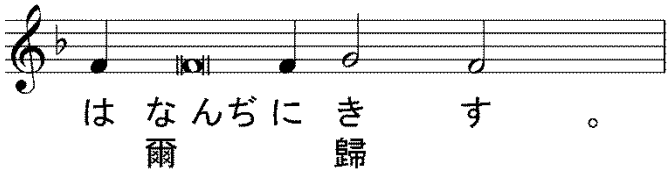


【　福音經（エヴァンゲリオン）　イオアン福音書14端4章5節～42節　】

代禱）睿智、

誦經）イオアン傳の聖福音經の讀、





代禱）謹みて聽くべし、

誦經）彼の時イイスス サマリヤの邑シハリと名づくる處に來れり、イァコフが其子イオシフに與えたる地に近し。彼處にイァコフの井あり。イイスス旅に疲れて、井の傍に坐せり。時約六時なり。サマリヤの婦、水を汲む爲に來れり。イイスス之に謂う、我に飲ましめよ。蓋其門徒は食を市はん爲に邑に往けり。サマリヤの婦彼に謂う、爾はイウデヤ人たるに、如何にして我サマリヤの婦に飲むを求むるか。蓋イウデヤ人とサマリヤ人とは相交際せざるなり。イイスス之に答えて曰えり、若し爾は、神の賜、及び我に飲ましめよと、爾に言う者の誰たるかを知らば、爾自ら彼に求めん、而して彼は爾に活ける水を與えん。婦彼に謂う、主よ、爾に汲む器なく、井も亦深し、然らば何より爾に活ける水あるか。爾豈我が祖イァコフより大なるか、彼は我等に此の井を與え、己も、其諸子も、其家畜も、之より飲みたり。イイスス答えて謂えり、凡そ此の水を飲む者は、復渇かん、然れども我が與えんとする水を飲む者は、世世に渇かざらん、乃我が彼に與えんとする水は、其中に於て永遠の生命に湧く水の泉と爲らん。婦彼に謂う、主よ、我に此の水を與えよ、我が渇かず、亦此に來りて汲まざらん爲なり。イイスス之に謂う、往きて、爾の夫を呼びて、此に來れ。婦對えて曰えり、我に夫なし。イ

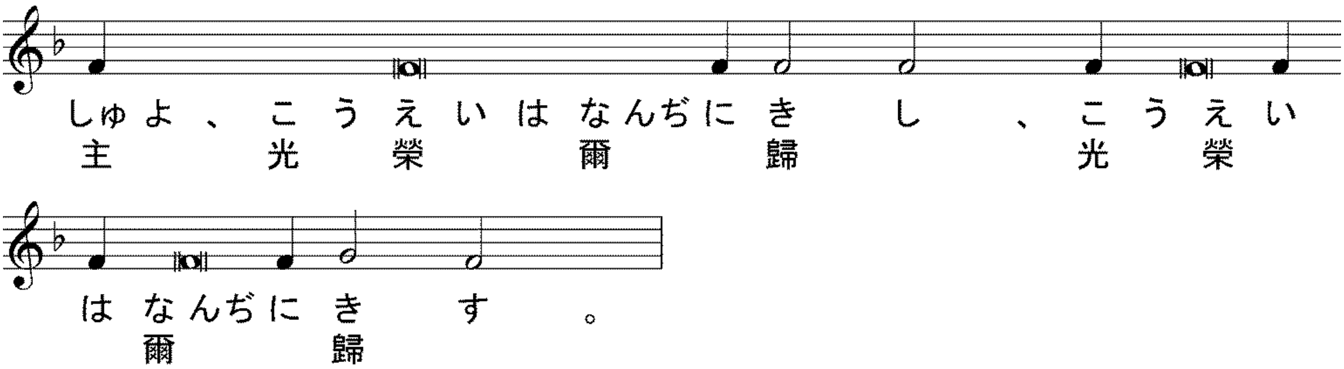
イススに謂う、爾が夫なしと言いしは是なり、蓋爾に五人の夫ありき、而して今ある者は爾の夫に非ず、此れ爾眞を言えり。婦彼に謂う、主よ、我觀るに爾は預言者なり。我が先祖は此の山に拜せり、然るに爾等は拜すべき處はイェルサリムに在りと言う。イイススに謂う、婦よ、我を信ぜよ、此の山にも非ず、イェルサリムにも非ずして父を拜せん時は來る。爾等は拜する所を知らず、我等は拜する所を知る、蓋救はイウデヤ人よりするなり。然れども時は來る、今は是なり、眞の禮拜者は神を以て眞を以て拜せん、蓋父は是くの如く彼を拜する者を覓む。神は神なり、彼を拜する者は神を以て眞を以て拜すべし。婦彼に謂う、我知る、メッシヤ、即ハリストスは來らん、彼來る時、悉く我に告げん。イイススに謂う、是れ我、爾と語る者なり。適其門徒來りて、彼が婦と語れるを異みたれども、一も、爾は何を求むるか、或は之と何を語るかと、云いし者なし。時に婦其水甕を遺して、邑に往きて、人人に謂う、來りて、我が凡そ行ひし事を我に告げし人を觀よ、是れハリストスに非ずや。人人邑を出でて、彼に往けり。此の際門徒彼に請いて曰えり、夫子、食え。然れども彼は之に謂えり、我に食うべき糧あり、爾等が知らざる者なり。故に門徒互に言えり、豈孰か彼に食を饋りたる。イイススに謂う、我が糧は我を遣しし者の旨を行い、其功を成就するに在り。爾等は尚四月にして收穫は來らんと云うに非ずや、我爾等に語ぐ、爾等目を擧げて、田を觀よ、已に白くして穫るべし。穫る者は値を得て、實を永遠の生命に積む、播く者も穫る者も共に喜ばん爲なり。蓋彼は播き此は穫ると云えるは、斯に於て眞なり。我爾等を遣して、爾等が勞せざりし所を穫らしむ、他人は勞し、爾等は其勞に入れり。彼の邑の多くのサマリヤ人は婦が、彼は我が凡そ行いし事を我に告げたりと、證せし言に因りて彼を信ぜり。故にサマリヤ人は彼に就きし時、偕に留らんことを請えり、彼は彼處に留りしこと二日なり。尚多くの者は彼の言に因りて信ぜり。而して婦に謂えり、我等は已に爾の言に因りて信ずるに非ず、蓋自ら聞きて、彼は誠に世の救主ハリストスなりと知れり。

＊＊

（比較用　口語訳）イエスはサマリヤのスカルという町においでになった。この町は、ヤコブがその子ヨセフに与えた土地の近くにあったが、そこにヤコブの井戸があった。イエスは旅の疲れを覚えて、そのまま、この井戸のそばにすわっておられた。時は昼の十二時ごろであった。ひとりのサマリヤの女が水をくみにきたので、イエスはこの女に、「水を飲ませて下さい」と言われた。弟子たちは食物を買いに町に行っていたのである。すると、サマリヤの女はイエスに言った、「あなたはユダヤ人でありながら、どうしてサマリヤの女のわたしに、飲ませてくれとおっしゃるのですか」。これは、ユダヤ人はサマリヤ人と交際していなかったからである。イエスは答えて言われた、「もしあなたが神の賜物のことを知り、また、『水を飲ませてくれ』と言った者が、だれであるか知っていたならば、あなたの方から願い出て、その人から生ける水をもらったことであろう」。女はイエスに言った、「主よ、あなたは、くむ物をお持ちにならず、その上、井戸は深いのです。その生ける水を、どこから手に入れるのですか。あなたは、この井戸を下さったわたしたちの父ヤコブよりも、偉いかたなのですか。ヤコブ自身も飲み、その子らも、その家畜も、この井戸から飲んだのですが」。イエスは女に答えて言われた、「この水を飲む者はだれでも、またかわくであろう。しかし、わたしが与える水を飲む者は、いつまでも、かわくことがないばかりか、わたしが与える水は、その人のうちで泉となり、永遠の命に至る水が、わきあがるであろう」。女はイエスに言った、「主よ、わたしがかわくことがなく、また、ここにくみにこなくてもよいように、その水をわたしに下さい」。イエスは女に言われた、「あなたの夫を呼びに行って、ここに連れてきなさい」。女は答えて言った、「わたしには夫はありません」。イエスは女に言われた、「夫がないと言ったのは、もっともだ。あなたには五人の夫があったが、今のはあなたの夫ではない。あなたの言葉のとおりである」。女はイエスに言った、「主よ、わたしはあなたを預言者と見ます。わたしたちの先祖は、この山で礼拝をしたのですが、あなたがたは礼拝すべき場所は、エルサレムにあると言っています」。イエスは女に言われた、「女よ、わたしの言うことを信じなさい。あなたがたが、この山でも、またエルサレムでもない所で、父を礼拝する時が来る。あなたがたは自分の知らないものを拝んでいるが、わたしたちは知っているかたを礼拝している。救はユダヤ人から来るからである。しかし、まことの礼拝をする者たちが、霊とまことととをもって父を礼拝する時が来る。そうだ、今きている。父は、このような礼拝をする者たちを求めておられるからである。神は霊であるから、礼拝をする者も、霊とまことととをもって礼拝すべきである」。女はイエスに言った、「わたしは、キリストと呼ばれるメシヤがこられることを知っています。そのかたがこられたならば、わたしたちに、いっさいのことを知らせて下さるでしょう」。イエスは女に言われた、「あなたと話をしているこのわたしが、それである」。そのとき、弟子たちが帰って来て、イエスがひとりの女と話しておられるのを見て不思議に思ったが、しかし、「何を求めておられますか」とも、「何を彼女と話しておられるのですか」とも、尋ねる者はひとりもなかった。この女は水がめをそのままそこに置いて町に行き、人々に言った、「わたしのしたことを何もかも、言いあてた人がいます。さあ、見にきてごらんなさい。もしかしたら、この人がキリストかも知れません」。人々は町を出て、ぞくぞくとイエスのところへ行った。その間に弟子たちはイエスに、「先生、召しあがってください」とすすめた。ところが、イエスは言われた、「わたしには、あなたがたの知らない食物がある」。そこで、弟子たちが互に言った、「だれかが、何か食べるものを持ってきてさしあげたのであろうか」。イエスは彼らに言われた、「わたしの食物というのは、わたしをつかわされたかたのみこころを行い、そのみわざをなし遂げることである。あなたがたは、刈入れ時が来るまでには、まだ四か月あると、言っているではないか。しかし、わたしはあなたがたに言う。目をあげて畑を見なさい。はや色づいて刈入れを待っている。刈る者は報酬を受けて、永遠の命に至る実を集めている。まく者も刈る者も、共々に喜ぶためである。そこで、『ひとりがまき、ひとりが刈る』ということわざが、ほんとうのこととなる。わたしは、あなたがたをつかわして、あなたがたがそのために労苦しなかったものを刈りとらせた。ほかの人々が労苦し、あなたがたは、彼らの労苦の実にあずかっているのである」。さて、この町からきた多くのサマリヤ人は、「この人は、わたしのしたことを何もかも言いあてた」とあかしした女の言葉によって、イエスを信じた。そこで、サマリヤ人たちはイエスのもとにきて、自分たちのところに滞在していただきたいと願ったので、イエスはそこにふつか滞在された。そしてなお多くの人々が、イエスの言葉を聞いて信じた。彼らは女に言った、「わたしたちが信じるのは、もうあなたが話してくれたからでは

ない。自分自身で親しく聞いて、この人こそまことに世の救主であることが、わかったからである」。

＊＊＊



※代式祈祷③　へ